

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32718

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01462

研究課題名(和文) 思想、運動、そして制度化：東南アジアにおけるサラフィー主義の定着過程の研究

研究課題名(英文) Study of Salafism in South East Asia: its thoughts, movements and institutionalization

研究代表者

河野 毅 (Kohno, Takeshi)

東洋英和女学院大学・国際社会学部・教授

研究者番号：10361883

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東南アジア3カ国(インドネシア、マレーシア、フィリピン)に到来したサラフィズムの受け入れについては、均一なものではなく、国家の役割で違いが出ており、それはサラフィズムそのものの影響というよりも、既存の国家と社会との関係において拡大の方向と範囲が変わるものであることを明らかにした。しかし、2年半に及ぶコロナ禍で海外調査が困難な状況に陥り、コロナ禍収束以降の半年ほどでのデータ収集は特殊時のデータとなりこれも難しい状況になった。今後の課題としては、現代の課題(例えば地球温暖化や貧困の解消など)に取り組むイスラム教育の役割を研究することで実用的な政策提言も可能になるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思想が制度化するプロセスという解明を通じ、社会科学の理論構築を助けるための研究というのが当初の学術的な意義である。中東発のイスラム原理主義思想であるサラフィズムが東南アジア地域に定着する制度化を理解するためには、制度化を政治学や社会運動論(権力をめぐる駆け引きの結果制度として定着する)、経済学(価格と同じく経済合理性に基づいて均衡安定する)、政治学と経済学の共同研究(制度が発するインセンティブ構造と権力闘争の結果勝者が制度を維持する)などの様々なアプローチを活用して理解する必要があると考える。

研究成果の概要(英文)：This study revealed that the acceptance of Salafism in the three Southeast Asian countries (Indonesia, Malaysia, and the Philippines) is not uniform, and the role of the state explains the differences. This is because the direction and scope of expansion is not so much due to the influence of Salafism itself, but rather in the relationship between the existing state and society. However, due to the two-and-a-half-year-long COVID-19 pandemic, planned overseas surveys became difficult, and data collection in the latter half-year after the downturn of the pandemic became difficult due to unusual field conditions at the time. In the future, it will be possible to make practical policy recommendations by studying the role of Islamic education in addressing contemporary challenges (such as climate change and poverty).

研究分野：政治学

キーワード：サラフィー主義 東南アジア 原理主義 政治制度 教育制度

### 1. 研究開始当初の背景

外来思想の定着する過程について、制度化する過程と捉えた学術研究は少ない。中東発のイスラム原理主義思想であるサラフィズム(サラフィー主義, Salafism)が東南アジア地域に定着する制度化を理解するためには、制度化を政治学や社会運動論(権力をめぐる駆け引きの結果制度として定着する)、経済学(価格と同じく経済合理性に基づいて均衡安定する)、政治学と経済学の共同研究(制度が発するインセンティブ構造と権力闘争の結果勝者が制度を維持する)などの様々なアプローチを活用して理解する必要があるという理論的前提 (assumption) から始まった研究である。

### 2. 研究の目的

本研究では、中東発のイスラム原理主義思想であるサラフィズムが東南アジア地域に定着する制度化を理解するために、インドネシア、マレーシア、フィリピンの3カ国において1970年代以降に中東から「輸出」された同思想がどのような過程を通じて東南アジアに定着したかを、イスラム教育機関の役割を例にして研究する。サラフィズムは、イスラム教発祥当時の時代に信仰された様式と行動が現社会においても模範であると信じる原理主義思想である。理論的には、次の2点が重要である。まず、制度化のばらつきを理解:当該3カ国ではなぜサラフィー主義の浸透の過程にばらつきがあるのだろうか。サラフィー主義が1970年代後半からオイルマネーとともにグローバルに伝播し、中東外の他国へ伝播し、運動化し、時には制度化(institutionalize)する過程は、インドネシア、マレーシア、フィリピンのイスラム教育の制度化のプロセスで見ることができる。3カ国のばらつきは、一般的には国家の役割という側面から説明することができる。例えば、独立後の3カ国を見ると、インドネシアでは国家の宗教教育カリキュラムは国家教育省ではなく宗教省の管轄で且つ行政の力は弱かった。マレーシアでは、首相府の権力を背景に国教であるイスラムの教育制度は国家主導で進められた。フィリピンでは、ミンダナオ島のマイノリティー集団であるイスラム教徒の教育制度として中央政府の政策上のプライオリティーは極めて低く、その行政の力は極めて弱かった。しかし、サラフィー主義に焦点を当てた制度化の過程については比較研究されていないため、本研究でその制度化の過程のばらつきが明らかになることが期待される。次に、思想が過激化行動になる過程の理解の解明である。原理主義思想であるサラフィー主義が社会運動となり(例えば中東発祥の原理主義運動ヒズブット・タフルの東南アジアでの成長)、時には過激化する理由は何であろうか。本研究では、サラフィー主義の行動を3分野(ダッワ(布教)、ハラキ(運動)、ジハード(闘争))に分け、暴力的過激主義についての学術的理解の深化に寄与する。以下(3)で詳述するように、サラフィー主義の行動をこれら3分野に分けて、当該3カ国の状況を整理することで、暴力的過激主義を特出でき、特に闘争の分野に分けられるグループの分析を可能とする。この整理作業に基づいて、暴力的な行動に至った過程を説明する。

### 3. 研究の方法

(1)当初の研究方法は以下のとおりであった。まずは、サラフィズムの分類(上記の3つの行動形態であるダッワ、ハラキ、ジハード)に当該3カ国のオイルショック以降の状況を焦点にし、その3分類が現状を説明しうるものかどうか海外調査を実施すること、そして、3カ国で海外調査の機会に現地研究会を実施し、その過程で調査結果を学会発表なので公表すること、そして最終的な調査結果を書籍にまとめ広報することであった。この調査のカウンターパートは、ジャムハリ・マクルフ(2021年よりインドネシア国際イスラム大学副学長、それ以前は国立イスラム大学シャリフ・ヒダヤトゥラ校副学長)、カマルルニザム・アブドゥーラ(2022年からマレーシア民族大学教授、それ以前は北マレーシア大学教授)、ジュルキフリ・ワディ(フィリピン大学ディリマン校イスラム研究所所長)である。

(2)しかし、2020年2月のフィリピンのダバオ市での会議以降、コロナ禍の拡大に伴って、海外調査は不可能となり、その結果、オンラインと既存の文献収集に切り替えざるを得なかった。具体的には、4カ国(日本、インドネシア、マレーシア、フィリピン)を繋いだ学術的議論2020年には3回、2021年には18回、2022年には12回のオンラインで進め、学会発表等の機会を決め、それに向けて執筆中のペーパーを議論した。

### 4. 研究成果

(1)2年半に及びコロナ禍で海外調査が困難な状況に陥ったことは最初に明記しないといけな。コロナ禍の直接的な影響は3点。まず第1に日本政府を含む各国政府の渡航規制により物理的に研究のための調査が不可能になった点。第2に、研究代表者含め調査のカウンターパートの本人感染または家族や同僚の感染者の濃厚接触者になったことで調査に出動できなくなった点。第3に、調査対象とした地域で調査の受け入れを固辞された点。間接的には、データの信憑性の問題がある。コロナ禍が収束する過程にあった2022年末から2023年初めの海外調査であっても、調査対象として訪問したイスラム寄宿塾の生徒数の減少やそれに伴う経済基盤の弱体化な

ど通常の運営状況とは全く違う現場での調査となったため、そのデータは一時的な外れ値であり、傾向を見るための基礎資料とはならない可能性が高い。以上の直接的並びに間接的なコロナ禍の影響の結果、本調査の研究成果は中途半端な結果となったことは否めない。一方、本研究をそのまま延長するという選択肢があったのではないかと、という疑問が生じる。この点についても、代表者とカウンターパートで議論した結果、コロナ禍での影響は現場にとっても数年は継続するという判断であり、数年の延長では平時のデータ収集は難しいという結論に至ったため、同じリサーチデザインでの延長はせず、文献調査以外の資金残額は国庫に返納した。

(2)しかし、上記「研究の方法」で説明したとおりコロナ禍でもできるだけの研究は進めた結果、以下の成果を得ることができた。第1に、東南アジア各国に到来したサラフィズムの受け入れについては、均一なものではなく、国家の役割で違いが出ており、それはサラフィズムそのものの影響というよりも、既存の国家と社会との関係において拡大の方向と範囲が変わるものであること。例えば、インドネシアでは、国家と社会の中間グループとして1920年代から活動をする既存のイスラム団体(最大のものはムハマディアとナフダトゥール・ウラマであるが他にも中小規模もグループもある)がサラフィズムの受け入れの役割を負い、その結果同思想の拡大の方向と範囲が変わっている。インドネシアではイスラム教育の方針は、既存のイスラム団体に任されてきており、国家は宗教省を通じた主に補助金予算の配分による社会コントロールをしてきた。その結果、1970年代から流入した中東地域からの資金とサラフィズムの教育は各社会団体の裁量に任される度合いが大きい。マレーシアでは、約3割の中華系国民と1割のインド系国民、そして最大のマレー系国民の人種間不和問題を抱えていることで、イスラムという宗教そのものが不和を助長する要素であると国家が捉えており、さらに投票人総数最大のマレー系国民の統治目的でイスラム教を利用するという国家の手法がある。そのため、国家はできる限りイスラム教を統治の道具として活用してきた。よって、サラフィズムの拡大の方向と範囲も国家の裁量によってコントロールされてきたようである。フィリピンでは、カトリック信者が多数派を占めており、さらに地域的にも極めて少数派のイスラム教徒はミンダナオ島の西部に集中していることから国家によるイスラム教への関与は統治という側面から考えるとその影響力は限られている。一方、イスラム団体による武装化と分離主義運動の高揚に伴い、国家統一という方向性への障害としてイスラム教徒が捉えられ内戦が激化して、国家によるイスラム教のコントロールは分離主義運動の弾圧の一環として理解された。その結果、国家によるサラフィズム拡大の方向と範囲については、国家関与が薄いときはその流入を許すことになりイスラム過激派(アルカイダやイスラム国など)のメンバーや信奉者が活動する舞台となったが、その後の懐柔策で国家によるイスラム教育への関与は深まったようである。

(3)第2に、直近のインドネシアでは、サラフィズムを基礎にした教育機関の勃興も確認できる。例えば、首都ジャカルタ近郊のタンゲラン市にある「イブヌ・マスッド」イスラム寄宿塾を例にとると、聖典コーランの暗誦、全ての科目をアラビア語で教授しアキダ、フィキなどの科目もイスラム教の始まりの時代を背景に、その当時に忠実な内容とすることに努力しており、一見時代錯誤と思えるような内容であるが有名俳優や一般の中産階級の国民からの支持を得てソーシャルメディアでも広く知れ渡るイスラム寄宿塾として存在している。そこには、排他的な側面が見受けられる一方純粋主義への傾倒という社会風潮が現れている。一方、既存のイスラム団体の代表格ナフダトゥール・ウラマとムハマディアは、サラフィズムの浸透に警戒感を表しており、特にムハマディアでは、その教育機関は法人格であるため、ナフダトゥール・ウラマの学校群のように所有者個人の裁量が大きくなく、サラフィズムが入りやすいという傾向がある(ジャムハリ・マクルフ)。

(4)第3に、マレーシアでは1980年代以降の国家主導の社会のイスラム化の結果、官僚組織やエリート間でイスラム教への崇拝が強化され、その結果はアラブ化(Arabisation)という形態をとってきている。それはハラール運動、国立学校と私立のイスラム学校のカリキュラムのアラブ化、サラフィズムに影響された政策が打ち出されるなどに見られるが、バングラデシュやインドなど南アジアからの影響も大きいようである。現地に定着していたスーフィー的イスラムの対抗軸として制度化されてきた(カマルルニザム・アブドゥーラ)。

(5)第4に、フィリピンでは既存のイスラム学校(マダリス)の制度的な弱さ(経済的、人材的に脆弱)があり、確かにサラフィズムの拡大が認められるが、その方向と範囲は極めて限られたものとなっている。しかし同時に、ソーシャルメディアの拡大とそのメッセージングは、国境を超えたサラフィズムの英語での発信と受信を確実なものとするため、若者層への同思想の浸透が進むように見える。そのため、ミンダナオのマダリスの国家による主流化は実験段階と言える(ジュルキフリ・ワディ)。

(6)この研究の今後の課題は、過激化へのプロセスの分析には到達できなかったこと、そして当初想定されていたがコロナ禍で実施できなかった現地調査(3カ国中のどの地域と学校のサンプルを選ぶかを含む)が困難となったこと、である。そして、コロナ禍に影響されない状況でのデータ収集が必要であること、そして当初想定した理論構築に至るための十分か議論をするためにそのデータの開示をするためのプラットフォームの設置が必要である。一方、リサーチデザインを柔軟にし、現代の課題(例えば地球温暖化や貧困の解消など持続可能な開発目標に含まれる目標など)に取り組むイスラム教育の役割に集中することは、学術的な理論構築から離れるものの、政策提言の役割を負う重要な課題と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Takeshi Kohno	4. 巻 28
2. 論文標題 To Combat Extremism, How to Frame Religion Matters: Southeast Asia in Comparative Perspective	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studia Islamika	6. 最初と最後の頁 483-516
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.36712/sdi.v28i3.23955	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Kohno, Takeshi; Makruf, Jamhari; Wadi, Julkipli; Abdullah, Kamarulnizam	4. 巻 Vol 2020, No 8
2. 論文標題 Salafism from Ideas to institution	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Impact	6. 最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21820/23987073.2020.8.9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Takeshi Kohno
2. 発表標題 Theoretical Aspect on Ideas, Movement and Institutionalization of Salafism in Southeast Asia
3. 学会等名 12th International Conference of Asian Scholars（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takeshi Kohno
2. 発表標題 How Far is Too Far? Learning from Suharto's Politics Toward Three "extremes" - Islamism, Leftism, and Regional Separatism
3. 学会等名 International Colloquium on Interdisciplinary Islamic Studies 2019（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takeshi Kohno
2. 発表標題 Social Resilience and State-Society Relations in Indonesia, Malaysia and the Philippines: Contextualizing Salafism
3. 学会等名 The 21st Annual International Conference on Islamic Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takeshi Kohno
2. 発表標題 To Combat Extremism, How to Frame Religion Matters: An Overview
3. 学会等名 State Response to Extremism sponsored by Rajaratnam Institute of International Studies, Singapore (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野毅
2. 発表標題 「科研費研究「思想、運動、そして制度化：東南アジアにおけるサラフィー主義の定着過程の研究」の理論的側面について」
3. 学会等名 東京外国語大学AA研共同研究課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究 トランスナショナルなネットワークと現地の応答」(オンライン) (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	マクルフ ジャムハリ  (Makruf Jamhari)	インドネシア国際イスラム大学・Vice Rector	Previously with Univesitas Islam Negri Syarif Hidayatullah

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アブドラー カマルルニザム  (Abdullah Kamarulnizam)	マレーシア民族大学・IKMAS・Professor	Previously with Univesiti Utara Malaysia
研究協力者	ワディ ジュルキフリ  (Wadi Julkipli)	フィリピン大学ディリマン校・Institute of Islamic Studies・Professor	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
Round Table Discussion on on Dissemination Processes of Salafism in Southeast Asia	2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
インドネシア	Universitas Islam Negri	Pusat Penelitian Islam dan Masyarakat		
マレーシア	Universiti Utara Malaysia			
フィリピン	University of the Philippines Diliman	Institute of Islamic Studies		